韓半島における 20世紀の日本語伝統詩歌の展開

Inkyung UM (嚴仁卿 : Associate Professor of Global Institute for Japanese Studies Korea University)

✉ uik6650@korea.ac.kr

(韓国)高麗大学校グローバル日本研究院副教授。日本語詩歌文学、日韓比較文化論。『文学雑誌『国民詩歌』と韓半島における日本語詩歌文学』(ソウル：亦楽, 2015)、『A Study of the Formation of Japanese Language Literature in Colonial Korea : Japanese Magazines, Japanese Translations of Joseon Literature, and Traditional Japanese Poetry』(INTERDISCIPLINARY STUDIES OF LITERATURE Vol.1, No.1, Hong Kong : Knowledge Hub Publishing Company LTD, 2017)、『韓半島と日本語詩歌文学』(ソウル：高麗大学校出版文化院, 2018)、『Changes to Literary Ethics of Tanka Poets on the Korean Peninsula during the Japanese Colonial Era』(FORUM FOR WORLD LITERATURE STUDIES Vol.10, No.4, Hong Kong Knowledge Hub Publishing Company LTD, 2018) など。

The Aspect of the 20th Century Japanese Traditional Poetry in Korean Peninsula

This paper considers the aspects of traditional Japanese poetry that developed on the Korean Peninsula in the 20th century, and the ways in which it grew out of the historical context. By the 1910s, a school of poetry based on Haiku, Tanka, and Senryu had formed, promulgated through the literary pages of various magazines and newspapers. In the 1920s for example, the literary journals *Shinjin*, *Kusanomi*, *Kame*, and *Senryuzanmai*, as well as works of each genre in book form were published on a large scale, as part of the cultural policies of the Governor-General of Korea. At this time, various short forms of poetry (including Dodoitsu) developed, and there were conflicts and contentions among literary groups over the poetic use of local (Joseon) content and color. Soon after the Sino-Japanese War, even in the context of a hermetically-sealed literary world, *Mizukinuta*, the journal focused on Haikus, and *Kokuminshiika*, focused on Tankas, were quickly produced to keep these genres alive, and seem to have continued to agonize over their role while attempting to accommodate themselves to the historical situation. However, it can be said that the Haiku and the Tanka became marginal literary forms in the second half of the 20th century on the Korean Peninsula, due to the tension in Korea-Japan relations, and despite the spread of these forms globally.

Keywords The Korean Peninsula(韓半島), Literary pages(文芸欄), *Shinjin*(真人), *Mizukinuta*(水砒), *Kokuminshiika*(国民詩歌)

1 はじめに

韓半島で創作された日本語伝統詩歌に関しては、2010年頃まで少数の人々が言及するのみであったが¹、それも1910年の日本による韓半島の併合以前の文学結社を調査したり、一つの作品集や作家に焦点を当てたケースが多く、通時的に韓半島における日本伝統詩歌の文壇が如何にして形成され、また展開していったかが、巨視的な視点から把握されてこなかった。

1876年の開港以来、韓半島では植民の熱気が高まるとともに日本人の移住が始まり、1910年末には在朝日本人の数は17万余人に急増し、やがて韓半島の各地には日本人の居留民団や居留民会が形成された。在朝日本人たちは主要居留地を中心に、様々な植民地経営に携わることは勿論、コミュニティーを作り新聞や雑誌のような日本語媒体を発行しながら情報を共有していた。1910年の日本による併合がなされる前から、韓半島で刊行された多くの日本語総合雑誌や日刊紙などには実用的な情報や記事、論説のみならず、移住してきた日本人による文学作品も載せられ、媒体によってはこういった日本語文学を「文藝」や「文苑」のように、独立した欄として長期にわたって存続させた場合もあった。

韓半島における日本語媒体は早くもこのような文学的な内容をまとめた文芸欄を設けているが、小説やエッセー、評論のような散文は日本語媒体の文芸欄に載せられなかったケースも多く、しばらく中断するケースもあったが、俳句や短歌、川柳といった伝統詩歌ジャンルは、韓半島に日本語媒体が登場して以来1945年まで、殆どどの文芸欄で一貫して絶え間なく創作され²、文学結社が組織されたり、読者の投稿も積極的に取り入れたりなどしながら、日本語文学の主要なジャンルとして位置づけられた。

本稿では、20世紀の初頭から植民地末期に至るまで時代に沿って、韓半島で営まれた日本語伝統詩歌ジャンルの展開と様相をみていくこととする。

2 1910年代までの文学結社の登場と初期の日本語伝統詩歌

ここでは、20世紀初頭に韓半島で刊行された日本語雑誌の文芸欄を通して、当時短歌

1 허석「明治時代 韓國移住 日本人의 文學結社와 그 特性에 대한 調査研究」(『日本語文學』제3집, 한국일본어 문학회, 1997), 유옥희「일제강점기의 하이쿠 연구-『朝鮮俳句一万集』을 중심으로-」(『일본어문학』제26집, 일본어문학회, 2004), 나카네 다카유키「조선 시가(朝鮮詠)의 하이쿠 권역(俳域)」(『日本研究』第16輯, 고려대학교 일본연구센터, 2011), 구인모「단카(短歌)로 그린 조선(朝鮮)의 風俗誌-市内盛雄 編, 朝鮮風土歌集(1935)에 대하여」(『사이(SAI)』Vol.1, 2006), 楠井清文「植民地朝鮮における日本人移住者の文学-文学コミュニティの形成と『朝鮮色』, 『地方色』」(『アート・リサーチ』第10巻, 2010)などがある。

2 韓半島で刊行された歌誌7種、俳誌4種、柳誌5種と歌集22冊、俳句集12冊、川柳句集2冊などの現存本の書誌情報は次の研究資料に目録として提示されている。嚴仁卿「朝鮮半島における植民地日本語文学の本流——朝鮮で刊行された日本伝統詩歌資料をめぐって」(『跨境・日本語文学研究』創刊号, 高麗大学校日本研究センター, 2014), pp.274-278.

や俳句などの日本の伝統詩歌が韓半島でどのように創作され始め、文学活動としていかに展開していき、その役割や機能は如何なるものであったのかなどを考えたい。

まず、「外地」日本語文学の形成、韓半島における植民地日本語文学の成立及び展開と直接的に連関する日本語雑誌内での文学的な動きは、1900年代初頭から始まった。1900年に入り、韓半島で日本語新聞や雑誌が登場し、その中に文芸欄が設けられ、俳句が最も先に、そして作品数の面でも大きい割合を占めるようになるが、ここで興味深いところは、「内地」日本において近代俳句や短歌をめぐる議論された言説が、当時韓半島における日本語媒体の文芸欄でも取捨選択された上で反映された点である。

当然ながら、近代俳句において革新をなした正岡子規に関する評価は非常に高く、子規が開拓した「写生」の技法こそ俳句の最たる達成として認められ、以降植民地朝鮮の俳句言説においても、「写生」は重要概念となる。短歌の方は「内地」日本では1890年代以降、「和歌改良論」や「亡国の音」など、強烈で革新的な主張が登場し、それをめぐって賛否両論が激しく起こったの³に比し、この時期韓半島では歌論が盛んに論じられたことはないが、短歌・長歌・連歌など様々な和歌の実作が盛んに行われた。20世紀初頭から韓半島における日本語文学を構成する最も重要なジャンルであった俳句と短歌は、1890年代から1900年初頭に至る日本内の伝統的な詩歌をめぐる様々な議論と試みをその背景として吸い取り、韓半島各地の文学結社の活動にも反映させながら、韓半島の日本語文学の主要な流れとして位置づけられたことがわかる。

このように韓半島等の「外地」において日本語で創作された短歌・俳句は日本の動きを積極的に反映はしているが、それよりは「外地」という植民地のローカリティーのために、遥かに複雑な様相を呈するようになる。1900年代初頭に韓半島で営まれた日本語文学の中において伝統詩歌ジャンルの特徴と役割はどこにあったのか、当時の代表的な日本語雑誌であった『韓國交通會誌』、『韓半島』、『朝鮮之實業』などを中心に捉えてみたい。

まず、1902年創刊した『韓國交通會誌』には独立した文芸欄がなかったので、光風や槐堂といった(俳)号を用いる人々の短歌が断続的に掲載する形を取っている。理論あるいは背景の説明なく作品だけが収録されてはいるものの、「虎」「江華島の鉄砲」「大院君」など韓国的な短歌であることがはっきりした題目を歌材にしており、韓半島の日本伝統詩歌で朝鮮的な素材を取り入れようとする努力が日露戦争の以前から有ったことを裏付けている。また、一部の作品で日本の韓半島植民地化の当為性、あるいは支配のイメージを正当化しているという側面で、朝鮮的な歌題が当時の植民地主義の言説と相まって展開していることが見られる。

なお、韓国に関する情報の提供を通して、日本人の韓国への移住を促す目的で刊行した在韓日本人社会で発刊した最初の総合雑誌である⁴『韓半島』は文芸欄を備えている。文

³ 小泉夢三『明治歌論資料集成』(立命館出版部、1940)、久松潜一『近代詩歌論集』(日本近代文学大系59、角川書店、1973)が代表的である。

芸欄で俳句や短歌ジャンルが主流をなしている意味で、在朝鮮日本人のアイデンティティーの構築のため伝統的な文学の様式を転用している⁵点が指摘できると共に、一方では伝統詩歌の内容的な側面では初期の在朝鮮日本人が朝鮮と朝鮮人に対して持っていた認識の表象が垣間見られる。さらに、仁川を根拠にして短歌創作を主にしていた〈若菜会〉という文学結社があったことから、日露戦争に前後して既に韓半島には地域基盤の文学結社が伝統詩歌ジャンルを中心として成立していたことが確認できる。

釜山で発行された『朝鮮之実業』の「文苑」欄にも散文はもちろん、俳句をはじめ伝統詩歌が毎号掲載されていた。『朝鮮之実業』を通していても日本の伝統文芸である和歌や俳句分野には既にこのような文学結社が組織され活動した痕跡が確認できるが、この雑誌には第一号から〈一一会〉という結社の会員の詠草が載り、先行研究で言及されたように釜山刊行の日刊紙である『朝鮮日報』から数えた〈一一会〉会員の最小限人数である7名⁶を遥かに越える50名程の俳号が確認され、彼らは俳句作品と理論により『朝鮮之実業』の「文苑」欄を主導した。

そして『朝鮮之実業』には〈釜山詩會〉という結社名も見えるが、ここの会員の短歌や詩も相当数収録されており、1905年前後に俳句、短歌と詩のジャンル毎の文学結社が複数存立し、それぞれ決まった日本語雑誌や新聞を根幹にして創作と募集、場合によっては他結社との連合や競合活動も展開していった様相が追跡できる。

しかし、このような韓半島の日本語雑誌における文芸欄は1910年日本により韓半島が併合されて以来武断統治の期間は、独立した欄としての姿は見えなくなるなど退歩するが、そのような中でも短歌と俳句はいうまでもなく川柳までも地域結社を中心に創作が続けられた。これを裏付ける最も力強い根拠は、植民地期に韓半島一の日本語日刊紙であった『京城日報』に見られる。『京城日報』では1910年代の前半から日本語伝統詩歌の募集と選がなされ、そのコーナーが「日報俳壇」、「日報歌壇」と命名された。これらは「京日俳壇」、「京日歌壇」と改称されながら、次第に落ち着いた欄として広がりを持つようになり、川柳の場合も「日報柳壇」(後に「京日柳壇」)が成り立って詩壇などと同じような規模で維持された。そして文学結社や主要メディアを根拠にしていたこのような活動は、1910年代に入ってはじめて韓半島における日本語文学の「文壇」意識につながり、やがて1920年代になると京城を中心とした韓半島の各地でジャンルごとに専門雑誌や作品集の単行本を刊行するまでに至る。

この時期の雑誌の文芸欄を通じて、韓半島で日本語文学が形成されはじめた時期に創作された短歌を見ると、在朝日本人が韓半島での暮らしの中で如何なる側面を表現しようとしたかが垣間見られる。

4 단국대 동양학연구소「韓半島 해제」(『改化期 在韓日本人 雑誌資料集:韓半島』, J&C, 2006), pp. iv~vii.

5 박광현「조선 거주 일본인의 일본어문학의 형성과 (비)동시대성-『韓半島』와 『朝鮮之實業』의 문예란을 중심으로」(『일본학연구』제31집, 단국대학교일본연구소, 2010), pp. 328~329.

6 허석「明治時代 韓國移住 日本人의 文學結社와 그 特性에 대한 調査研究」(『日本語文學』제3집, 한국일본어문학회, 1997), p. 291.

- から国の虎伏す野辺も日の御旗掲げて祝ふ御代の春かな
(『韓國交通會誌』第2號, 1903.2)
- 南山松の木蔭に韓人の転寝すへき夏となりけり
(『韓國交通會誌』第3號, 1903.5)
- 白妙の衣の色に似ぬものはから国人の心なりけり
(『韓半島』第1巻第2號, 1904.1)
- 韓ぶりて十年過ぎなば故里に知る人も無き翁とならむ
- 麾あげて大野に立てば秀吉が笑んで勝得し心偲ばる
(『釜山詩會「韓ぶり」』『朝鮮之実業』第10號, 1906.3)

これら20世紀初頭の短歌からは、「中央」であり「内地」である日本から「周辺」であり「外地」である朝鮮に移住せざるを得なかった在朝日本人の不安と疎外感、さらに当時植民地主義に積極的に便乗しつつ男性的な気魄と大陸経営の抱負と希望を抱き、それに携わっている歌人たちの自己表現が読み取れる。また一方では、日本の歴史的な逸話や人物を取り上げることにより、これを共有できる在朝日本人の文化人との間の紐帯を強化しながら文化的な矜持を吹き込むことで、結果的に短歌という手段を持って優越的な共同体を志向していたとも言える。

一方、壬辰倭亂・丁酉再亂(日本では文禄・慶長の役と呼ぶ)の際、倭城臺があったとして、韓半島支配の象徴的な空間になっていた統監府と初期の総督府が位置した南山、つまり木覓山は、20世紀前半の間ずっと在朝日本人により詩歌に相当詠まれていたが、これはつまり韓半島に移住してきた初期の在朝日本人が、韓日間の長い歴史的な関係性を想起させ喚起する場所、つまり朝鮮の短歌の名所とも言える歌枕を模索し、多様な試みを実践していたことを意味する。

戦地の友に送る

- 日盛りや露軍に見ゆる投降 (『朝鮮之実業』第4號, 1905.9)
- 兩班の所有なりけり若葉山 (『朝鮮之実業』第12號, 1906.5)
- チゲグンのチゲにもたれて昼寝哉 (『朝鮮之実業』第13號, 1906.6)
- 春の日や韓人町の小賑ひ (『韓半島』第2巻第2號, 1906.4)
- 桃またき韓の三月三日かな (『韓半島』第2巻第3號, 1906.5)
- 温突に密勅を議す李朴の徒
- 宗国の臣茲に在す紀元節 鬼門 (『惡詩自稱』『朝鮮之実業』第20號, 1907.2)

この時期の俳句は、当時の植民地化への熱気や進取の気性を呈したり、在朝日本人の間の絆や消息伝達の手段として創作されたりした側面では短歌と相通じている。ところが、俳句は季題(季語)という約束事を有しているのが、独特の問題をも孕むが、朝鮮的な風物や素材などを扱う初期俳句と季題との関係では朝鮮固有の素材と季題に齟齬があることが指摘できる。つまり、開拓すべき対象として朝鮮の地を見つめてはいるが、季

題や花鳥諷詠が中心となり、抱負が感じられる進取的な俳句までにはつながらない。季題という必要最小限の俳句の成立要件が、朝鮮特有の言葉や固有の文化と衝突することで、朝鮮俳句としてのアイデンティティが不安定化するような状況が形作られていったのである。言い換えれば、朝鮮的な素材が俳句の季題設定と円滑に調和できないことは、未だに韓半島において創作された俳句が外地日本語文学として定着を見ていないことを示すと共に、このジャンルの限界をも代弁してくれる。

ここまで見てきたように、20世紀初頭に韓半島の小規模な文学結社を中心として展開した短歌や俳句などでは、「内地」日本を離れ異郷で暮す自分達の抱える疎外感と不安、さらには朝鮮人と朝鮮風物に対する差別的で否定的なイメージの表現、そして当時の植民地主義に立脚した男性的な気性がよく表れる帝国日本の謳歌など、多様な内容が交差していることが確かめられる。朝鮮の風物と朝鮮人を描写する時、俳句や短歌のような短詩型のジャンルにおいても、日本的なオリエンタリズムを見せる差別的な朝鮮表象は当時の日本語文学が共有している特徴とも言える。

3 多様化する1920年代以降の伝統詩歌文壇

このように、韓半島で創作・流通していた日本伝統詩歌ジャンルは、1900年代初頭からすでに韓半島の各地で文学結社を組織し、募集し選抜する態勢を整えており、1910年代に入ってから雑誌や日刊紙のような日本語媒体でジャンルごとに独立した欄を設け、安定的に運営するに至った。3・1独立万歳運動以来、1920年代に入ってはいわゆる文化統治の下で数多くの文芸雑誌が創刊するようになったが、ジャンル単独の専門雑誌を刊行したのは、俳句と短歌だけではなかった。5/7/5の三句17音の俳句と外観的には同じ定型律の川柳、そして俗歌の性格の強い7/7/7/5四句の26音の都々逸まで含め、日本伝統詩歌は大衆詩や情歌の領域まで取り入れながら、ジャンルごとの専門雑誌が韓半島から刊行されるほど基盤が固くなった。この時期の韓半島の日本伝統詩歌は、文壇を確固たるものにするだけでなく、量的・質的な活動もやはり飛躍的に拡大していったため、各々のジャンルにおける展開の具体的な様相を確認する必要がある。

まず、1920年代に韓半島の日本語伝統詩歌文壇で最も目立つ役割を果たしたのは歌壇と言える。短歌の場合、1920年代初期尾上柴舟主宰の『水甕』にいた小泉茅三や細井魚袋のような若手の歌人が渡韓することにより活性化する。小泉茅三は1922年4月韓半島最初の歌誌『ポトナム』を創刊した。「白楊」を意味する韓国語の「(양)버드나무」を雑誌の題名にすることで、朝鮮の歌誌であることを闡明した。『ポトナム』は1922年9月、創刊半年ぶりに特集を企画するなど、1922年から1923年前半まで約1年あまり、つまり『真人』という有力な歌誌が登場するまでは、韓半島の唯一の歌誌として在朝日本人歌人たちの根拠する活動舞台となった。

【図1】『ボトナム』の表紙

【図2】『真人』の表紙

ところが、1923年7月細井魚袋が市山盛雄と提携して『真人』を創刊することで、『ボトナム』と小泉荻三は韓半島で足場を失い大きく動揺することになる。それは『ボトナム』の主要同人であった歌人たちが『真人』に移ったことや、すぐ後の1923年9月に関東大震災により関東地域の印刷業などが壊滅状態に陥ったことに加え、『水甕』が後発である『真人』を支持・応援し韓半島の代表的な歌誌として認めてしまったからである。後に「朝鮮歌壇の開拓者」と呼ばれる市山盛雄は1924年の中盤から京城真人社の『真人』発行を中心的に担当し、1920年代の韓半島の歌壇と短歌の動向において最も中核をなす特集号⁷を出しながら、韓半島の歌壇の中心となっていた。

このように韓半島の歌壇を主導した『真人』は1920年代の後半、特集号を企画しながら歌人たちが地方歌壇である朝鮮が果たすべき役割として、朝鮮の郷土に立脚した朝鮮の古歌や古文学の研究に努めることを励まし、また多様な朝鮮文化観を誌面で展開していった。在朝日本人歌人たちは、こうして朝鮮の詩歌文学を日本語に訳する必須過程の中で、朝鮮民謡のリズムやニュアンスが完璧に伝わることはあり得ないという言語的な限界を確信していたようである。一方で朝鮮を絵画的に写生する描写の方法を選択し以下のような短歌を創作したと見られる。

- かたむける家みな屋根に石つめり火田を作る人の家かも 道久良
(『真人』第5巻第1号, 1927.1)
- 四木戯の棒なげあぐるわが手つきあやしけれどもやや勝ち越せり
- やつとばかりなげあげたれどあななやふ杰(コル)出でむとし開(ケ?)となりたる
(市山盛雄『真人』第6巻第4号, 1928.4)

次に、俳句について見てみたい。韓半島の俳壇では、「内地」日本では正岡子規から高

⁷ 1926年の「諸家の地方歌壇に対する考察」、1927年の「朝鮮民謡の研究」、1929年の「朝鮮の自然」を指す。

浜虚子へ繋がったホトトギス派が志向する正統派俳句が早くから韓半島の各地で盛んに作られ、当時の日本語文献などを見れば既に1910年代から俳誌を出していたことがわかる。1920年代に入ると、ホトトギス派は韓半島全域で結社活動を繰り広げ、京仁(京城と仁川)は言うまでもなく、釜山・大邱・大田・光州・平壤・元山・新義州などの主要都市で10種以上の俳誌が刊行されていた。興味深いことに、ホトトギス派のみならずそれと対立する新傾向俳句、つまり季題や切れ字、音数の定型すら守らない流派も1920年代の前半期には既に京城で専門雑誌を刊行しており、多様化した創作の礎が形作られていった。

現存本が確かめられる最も早い時期の俳誌『甕』がその一つである。「甕」とは女性が頭の載せて均衡をとりながら水を運んだり、味噌やキムチをつけておく器具を意味する。京城俳句会が1924年7月、10月に出した3号と6号が確認できるが、この雑誌には正岡子規のもう一人の代表的な弟子として守旧主義と対立した河東碧梧桐に同調する自由律の俳句が多く、例えば以下の通りである。

- ・ 電車青麦を走るひとりきりの内地人となった (加藤閑『甕』三号, 1924.7)
- ・ あげがたカチの来てとまる尾がうごく (山下暁洋『甕』六号, 1924.10)

【図3】『甕』六号(1924)の表紙

それから、三番目に川柳であるが、俳句と外形的な定型律などは同じだが、人事とユーモアがその核をなす川柳もやはり韓半島で専門の結社を形成し、極めて旺盛な活動を見せていた。ところが、活発な創作と享受に比べて専門の柳誌は長続きしなかったらしい。このような状況は存続の不安を抱いて刊行された「外地」川柳雑誌につけられた「三号雑誌」という不名誉な別名からも推察できる。例えば、1920年10月創刊した『南大門』は1921年12月に8号で終刊し、『神仙爐』は1922年9月に5号を切りに休刊し、1922年10月創刊した『鶏林川柳』は12月に3号で終刊し、1923年4月創刊した『芽やなぎ』は1924年3月9号で廃刊した⁸。京仁地域以

外にも1925年6月平壤で『川柳鼓』という川柳雑誌が創刊されたが、その中でも「半島の川柳雑誌の寿命が短い」という指摘が見られるため、これは韓半島において1920年代中盤まで俳句のような雅の文学に比べ、常に支持基盤が弱かった大衆詩の川柳界が直面した現実であったであろう。

このような状況を鑑みれば、1927年4月京城で創刊し1930年12月通巻45号までが確認される『川柳三昧』は韓半島における柳誌の代表格であったと言える。『川柳三昧』の発行

⁸ 横山巷頭子「南無山房雑筆」(『川柳三昧』第13号, 南山吟社, 1928), pp.15~18.

主体は京城の南山吟社で、雑誌の構成は主に川柳作品で、他にも多様な随筆、記事、小説的な内容、川柳評、韓半島全域の川柳句会の消息欄まで備えている。また川柳作品も、厳しい批評に基づいて体系的に募集したことがわかる。理論としては、ユーモアやウィットを中核とする川柳に対する愛着と近代的な生活詩としての精神が強調されている。作家たちの地域分布を見れば、韓半島、日本、「満州」地域、台湾が人的に繋がっていたことが見て取れる。この雑誌は京城を中心とした在朝日本人の知識層に広く読まれ、当時京城の雑誌と新聞の境界を行き来する、横断的な疎通の手段にもなっていた。彼らの川柳観は次のようなところから読み取れる。

- 川柳は詩であります。従って十七音の字を並べた丈で、詩として首肯し難いものは川柳ではありませぬ。

(和田天民「僕の川柳観」『川柳三昧』23号, 1929.4)

- 川柳を愛する心！それは、ウィットやユーモアの缺けてはならない近代人を象徴するスケールのうちに数えられる第一条件に仕たいものである。

(寺田五柳子「川柳礼賛」『川柳三昧』34号, 1930.3)

- 失業者妻には心強く云ひ

(南山吟社「五月例会-失業」『川柳三昧』39号, 1930.8)

四番目に都々逸であるが、この時期韓半島では短歌、俳句、川柳のみならず26音節の都々逸までが俚謡正調・新情歌・街歌といった様々な呼称で創作・享有された。それというのも、1920年代には韓半島でも都々逸ジャンルが移植され専門作品集が2冊、1927年には朝鮮唯一の都々逸専門雑誌『かち鳥』が刊行され、多くの人々が投稿したからである。「外地」である韓半島で俚謡正調という文芸ジャンルの活動を後押ししてくれる経済的な後援は、決して豊かであったとは言えないが、1920年に刊行した『かち鳥』第1輯の編集後記を見ると、当時集まった歌の数がおおよそ1,600余数で、作家は約130人程度と記載されており⁹、投稿者は「内地」日本は勿論、京城と釜山などの韓半島、「満州」地域と台湾等の「外地」に広範囲に分布していた。雑誌の題名の「かち鳥」は韓半島では吉鳥と考えられており、さらにその鳴き声がありふれた鳥という意味で付けられただろうが、「カチ」の漢字である「鵲」か、その日本語訓読みである「かささぎ」を使わず韓国語の影響から出来た「かち鳥」という呼称を使い、韓半島から発信する都々逸であることを明らかにしていた。

『かち鳥』の1920年の第一と第二の作品集の内容は、都々逸の基本性格に基づいた情歌が大半で、雑誌に寄稿した都々逸もほとんどそうであるが、朝鮮的な特性が垣間見られる創作都々逸の例から、日本で流通した都々逸とは見分けがつく『かち鳥』の特徴が指摘できる。

⁹ 高野宵灯「編集を終りて」(『かち鳥』霜月号, かち鳥俚謡社, 1927), p.32.

- ・高麗も長閑な日の御恵に伸る民草春の草
- ・海は隔てど霞の糸がつなぐ櫻の國と國 (『かち烏』第1集, 1920.5)
- ・高麗も百濟も瑞穂の國よ、聞いて嬉しい田植歌 (『かち烏』第2集, 1920.11)

【図4】『かち烏』
第一集(1920)の表紙

以上のように、1920年代の韓半島では短歌、俳句、川柳、都々逸がジャンル毎に専門雑誌を刊行しながら、文壇の意識を確固たるものにしていった。とりわけ、短歌と俳句は1930年代に入ってから、複数の流派が成立し競合したり、そうでなくとも「朝鮮的な詩歌」を発信し、雑誌や単行本作品集を通してジャンル毎の充実した作品活動を展開したこと¹⁰が確かめられる。

4 戦争期における日本語詩歌文壇

1930年代半まで朝鮮色をめぐる競合様相を呈していた歌壇と俳壇は、やがて1937年日中戦争の開始後から太平洋戦争を経て1945年8月の終戦に至るまでの戦争期に入ると雑誌の発行は言うまでもなく、物資不足と動員体制に形式的にも、内容的にも大きく影響されるようになった。総督府当局の指示に従い1941年韓半島の全ての文芸雑誌は余儀なく廃刊され、以後半年ほどは当局と文学者との間での葛藤及び論議の挙げ句、各ジャンルに雑誌が一種類ずつのみ許可されることになる。

これに最も早い対応を見せたのが日本語伝統詩歌の文壇、その中でも1930年代の後半までもホトトギス、新興俳句、石楠派に別れて競合していた俳壇であった。最も多くの会員を保っていたホトトギス派を中心に急遽朝鮮俳句作家協会を結成し、1941年7月『水砧』という韓半島唯一の俳誌として既存の雑誌を統合したのである。『水砧』は時局に応じた朝鮮俳句作家たちの総結集という形を取ってはいるものの、戦時下の新体制の下でも韓半島で長く生活してきた在朝日本人であるからこそ詠める「朝鮮俳句」という性格を明確にしようとする方向性を見せ、「内地」日本に比しても劣らない整った形の協会と機関誌を誕生させた点を全面に出した。

¹⁰ 嚴仁卿「朝鮮半島における日本伝統詩歌雑誌の流通と日本語文学の領分—短歌・俳句・川柳雑誌の通時的な展開—」(『日本思想史研究会会報』第30号, 日本思想史研究会, 2013), pp.22~41.

【図5】『水砧』の表紙と扉

【図6】『國民詩歌』の表紙

それから、俳句文壇より2ヶ月程遅れた1941年9月、歌壇は詩壇とジャンルの統合を成し遂げ国民詩歌連盟になり、その機関誌である『国民詩歌』を創刊した。既存の流派統合のみならず詩と短歌というジャンルの合体まで成した『国民詩歌』の成立には、流派間の葛藤を克服しなければならず、単一ジャンルに基盤をおいて先に発った『水砧』よりは時間がかかるしかなかった。といっても半年以上の空白期をもって朝鮮人作家たちの「二重言語文学」の場として11月崔載瑞主宰で創刊した『国民文学』よりは2ヶ月も先行していた。このように『水砧』と『国民詩歌』を創刊した俳壇と歌壇による「国民詩歌論」と「国民文学論」は『国民文学』の成立と言説生成に大きな刺激になったことと考えられる。

『国民詩歌』に関してはそのイデオロギーと位相及び価値が論じられたり¹¹、この雑誌の評論と関わった人物及び短歌と詩の実作が分析されたりした¹²。『国民詩歌』の場合、朝鮮唯一の詩歌雑誌で発行が許可され、創刊号には国民詩歌連盟の結成の経緯と目的などが明示されているが、それは国民総力の志向でもある「健全なる国民詩歌の樹立」¹³より外なかった。国民詩歌連盟は、「内地」で形成した歌壇の統一体である大日本歌人會が従来の結社組織になお重点をおいていたのに比べて、結社の代弁者的な立場と意識を清算し多様な流派になるべく「公正」な文学行動をとることを、遠隔の「外地」から「内地」に向けて発信しているというある種の矜持も表わしている。

名実共に「半島詩歌壇の最高指導機関」であり「詩歌壇の唯一の公器」であることを自負していた『国民詩歌』は、主に文学論・詩歌論・研究論文・随筆風の雑記・創作短歌・創作詩・編集後記で構成されていた。詩歌専門雑誌だけあって、詩と短歌のバランスを常に意識しているが、人数や編集の主導権などは既存の歌壇に置かれていたように見受けら

11 최현식「일제 말 시 잡지 『國民詩歌』의 위상과 가치(1)-잡지의 체제와 성격, 그리고 출판 이데올로기들-」(『사이間SAI』제14호, 국제한국문화학회, 2013), 최현식「일제 말 시 잡지 『國民詩歌』의 위상과 가치(2)-국민시론・민족・미의 도상학-」(『한국시학연구』제40호, 한국시학회, 2014).

12 엄인경「문학잡지 『國民詩歌』와 한반도의 일본어 시가문학」(역락, 2015).

13 道久良「編集後記」(『國民詩歌』創刊号, 國民詩歌發行所, 1941.9).

れる。その要因といえば、韓半島歌壇の組織と創作のインフラが詩壇よりは確かであったこと、「国民詩歌論」でその正統性を左右する最も大切な要因である日本語詩歌文学の「伝統」と「歴史」では断然短歌の方が優勢であったことなどが挙げられる。いくつかの短歌を見てみよう。

- ・百済の都ほろびし遠き代のなげきは生きむいまいしずるに

(末田晃『国民詩歌』創刊號, 1941.9)

- ・わがつくる慰問袋に入れむとて幼き子らは一日文書く

(三鶴千鶴子『国民詩歌』十月號, 1941.10)

扶餘神宮御造営

- ・海渡り王いくたびか脱れ来し歴史はかなし戦へる代に

(渡邊陽平『国民詩歌』十二月號, 1941.12)

- ・戦ふや忽ちにして眞珠灣に米艦隊を撃滅し去りぬ

(井村一夫『国民詩歌集』, 1942.3)

- ・東は八千三百キロの米本土西は一万二千キロの南阿南は休戦二百キロの濠洲に
精鋭進む

(西願寺信子『国民詩歌』第2巻第8號, 1942.8)

『国民詩歌』の短歌は多様な内容を含んでいるが、大方は戦争を支持し日本の勝利を称える歌、銃後の生活を描いた歌、韓半島の歴史や朝鮮人に対する認識を見せる歌などに大別できる。従って、『国民詩歌』には一、二ヶ月の間隔をおきながら、文学というよりは戦況の生々しい記録として、例を挙げるならば、インドシナ半島への日本軍進駐、太平洋戦争への突入、マレー海戦、真珠湾空襲などの戦場の状況が描かれる。さらに、日本の神話や古典の世界を引用することで、「大東亜共栄圏」建設の必然性と正当性を裏付けすることも確認でき、戦況の報道と記録という態度に汲々としたせいで、短歌の定型が崩れる例も増えていた。また、1942年以降には特に「愛国」が強調され、朝鮮の「皇民化」運動に積極的に取り組む短歌が増加するが、これは1942年11月の「愛国詩歌の問題」という特集号で最も顕著である。ただ、銃後の個人は戦争遂行の現実から感じるジレンマや抑圧された感情、憐憫と感覚の錯綜や混乱を吐露する歌もあり、画一的な国策文学であったとは言い切れない面もある。

国民詩歌発行所は雑誌『国民詩歌』の発行の外にも、断続的に詩歌作品集を刊行したが、まず第一詩歌集として刊行したのが1942年3月の『國民詩歌集』である。ここに収録された113名の歌人の短歌と47名の詩人の詩は、徹底的に大東亜戦争を記念し帝国の各軍に感謝と慰労を捧げる目的に応える国策詩歌一色の内容となっている。それから、20世紀に韓半島における最後の日本語詩歌作品集と言える1943年11月刊行の『朝鮮詩歌集』であるが、徴兵制の実施と学徒出身という当時の時局の流れを反映しようとする意図の下で、以下のような短歌が載せられている。

- ・ 皇恩のかたじけなさよ同胞は徴兵制實施をききて嗚咽す (新井美邑)
- ・ 益良夫のゆくべき道と天雲にいのち相撃つ空に征く日ぞ(学徒出陣)(末田晃)
- ・ 半島の子らも育ちて大君のみ楯と立たむ日の桜花

(道久良『朝鮮詩歌集』国民詩歌発行所、1943.11)

生々しい戦場の形象化、日本の神聖さと戦争の正当化を力説しながら、ある種の決意が確認される歌が多く、素材やイメージ化する方法は違うものの、戦争プロパガンダとしての詩歌という役割に充実した面が浮彫りにされるため、1940年代という植民地末期に展開した詩歌文学が背負った運命であったとも言えるかも知れない。ただ、『朝鮮詩歌集』には国策文学的な特性と共に、その題名通りに1920年代から30年代にかけて韓半島の伝統詩歌における主要モチーフであった朝鮮的な素材が多数用いられており、20世紀前半期に通時的な朝鮮色の表象様式の変貌という側面から今後の研究に必要があると考えられる。なぜならば、1943年11月という緊迫した戦況の中で、国策文学の最先鋒、文化戦の一翼を担うという役割の遂行が目的であったことは否定できないが、韓半島における日本語伝統詩歌が長い間悩んできた「朝鮮色」を文学が追い詰められた極限の状況下でも諦めなかったことを逆説的に示しているように思われてならないからである。

5 結びに代えて——韓半島における日本語伝統詩歌の現在

これまで見てきたように、20世紀前半まで韓半島では短歌、俳句、川柳など日本の伝統詩歌ジャンルは専門の雑誌や数十種の作品集が刊行される程、創作と享受の面では40年間余りかなり盛況であった。このような事実とともに、俳句や短歌がHAIKU、TANKAとして世界化している現況や俳句が中国、台湾、ベトナムで現地化したことなどを考えると、韓国における21世紀現在の日本伝統詩歌に関する低迷(創作はおろか、理解すら低く、主要詩歌作品さえ真面目に翻訳紹介されていない)はむしろ例外的に見える。20世紀の百年間を通して、話題になった韓国人俳人や歌人と言えば、「朝鮮の俳諧仏」と呼ばれた木浦の朴魯植(1897~1933)と、6冊の歌集を出し現代韓日文化の架け橋の存在と言われた孫戸妍(1923~2003)くらいしかないと言っても過言ではあるまい。

このような事情には20世紀から今現在に至るまでの韓日関係の桎梏の歴史が勿論影響していることも確かで、しかも文学の危機が叫ばれている状況であるから、他国の文学、ましてや定型律の詩歌など顧みる余裕も意味も許されなかったのかも知れない。しかし、20世紀に韓半島で営まれた日本語文学が韓国近代文学の成立や展開と深く絡み合っていることもまた事実であり、植民地日本語文学の持つ内容・形式・言語・心象など、様々な意味において混種性の呪縛に捕らわれている。

短歌や俳句といった伝統詩歌をはじめとする20世紀に韓半島で営まれた日本語詩歌文学を理解・研究し、その実状や全貌、アジアの他の地域との対照や文学ネットワークの

解明など、残された宿題はまだまだ山積みである。これらの究明を通し、「外地」日本文学の地平、さらには世界における植民地文学研究へと外縁を拓げられることで、均衡のとれた文学研究を図れることと期待する。

付記 この原稿は拙著『한반도와 일본어 시가 문학(韓半島と日本語詩歌文学)』(高麗大学校出版文化院, 2018)の内容を一部要約、抜粋し、東芝国際交流財団支援の特別企画「世界各地における日本伝統詩歌(短歌・俳句)の創作と変容」に合わせて修正したものである。

参考文献

- 久松潜一(1973)『近代詩歌論集』日本近代文学大系59, 角川書店. Hishamatsu, Senichi(1973) *Kindai Shiika Ronshu*, Kadokawashyoten
- 小泉茅三(1940)『明治歌論資料集成』立命館出版部. Koizumi, Tozo(1940) *Meiji Karon Shiryō Shyusei*: Ritsumeikan University Press.
- 楠井清文(2010)「植民地朝鮮における日本人移住者の文学-文学コミュニティの形成と「朝鮮色」, 「地方色」『アート・リサーチ』第10巻, 立命館大学アート・リサーチセンター. Kusui, Kiyohumi(2010) *Shyokuminchi Chosen ni okeru Nihonjin Ijyusyo Bungaku Communityno Keiseito Chosensyoku, Chihousyoku, Art Research* Vol.10, Ritsumeikan Univ. Art Research Center.
- 道久良(1941)「編集後記」『國民詩歌』創刊号, 國民詩歌発行所. Michihisa, Ryo(1941) *Henshyukouki Kokuminshiika* Vol.1, Kokuminshiika Hakkoujyo.
- 高野宵灯(1927)「編集を終りて」『かち鳥』霜月号, かち鳥謡社, p.32. Takano, Shoto(1927) *Henshyuwo owarite Kachikarasu* no.11, Kachikarasu Riyousya, p.32.
- 嚴仁卿(2013)「朝鮮半島における日本伝統詩歌雑誌の流通と日本語文学の領分—短歌・俳句・川柳雑誌の通時的な展開—」『日本思想史研究会会報』第30号, 日本思想史研究会, pp.22~41. Um, Inkyung(2013) *Chosenhantouni okeru Nihon Dentoushiika Zassino Ryutsuto Nihongobungakuno Ryoubun*: Tanka, Haiku, Senryu Tsujitekina Tenkai, *Nihonsisoukenkyukaikaihō* Vol.30, pp.22-41.
- 嚴仁卿(2014)「朝鮮半島における植民地日本語文学の本流——朝鮮で刊行された日本伝統詩歌資料をめぐって」『跨境・日本語文学研究』創刊号, 高麗大学校日本研究センター, pp.274~278. Um, Inkyung(2014) *Chosenhantouni okeru Shyokuminchi Nihongobungakuno Honryu*: Chosende Kankousareta Nihongo Shiika Shiryuwo megutte: *Kokyou Nihongobungakukenyū* Vol.1, KUIC, pp.274-278.
- 横山巷頭子(1928)「南無山房雜筆」『川柳三昧』第13號, 南山吟社, pp.15~18. Yokoyama, Kotoshi(1928) *Namusanbou Zakki Senryuzanmai* Vol.13, Nansanginshya, pp.15-18.
- 최현식(2013)「일제 말 시 잡지 『國民詩歌』의 위상과 가치(1)-잡지의 체제와 성격, 그리고 출판 이데올로기들-」『사이間SAI』제14호, 국제한국문화문화학회. Choe, Hyunsik(2013) *Ilje mal Shi Japji Kokuminshiikaui Wisanggwagachi* (1): Japjiui Chejewa Seongyeok, gurigo Chyulpan Ideologuedeul *SAI* Vol.14, Gukjehangukmunhakmunhwahakoe.
- 최현식(2014)「일제 말 시 잡지 『國民詩歌』의 위상과 가치(2)-국민시론・민족・미의 도상학」『한국시학연구』제40호, 한국시학회. Choe, Hyunsik(2014) *Ilje mal Shi Japji Kokuminshiikaui Wisanggwagachi* (2): Gukminshiron, Minjok, Miui dosanghak: *Hangukshihakyeongu* Vol.40, Hangukshihakoe.
- 단국대 동양학연구소(2006)「韓半島 해제」『改化期 在韓日本人 雑誌資料集: 韓半島』, J&C, pp.iv~vii. Dangukdae Dongyanghak yeonguso(2006) *Hanbando Haeje: Gaehwagi Jehanilbonin Japjizaryozip: Hanbando*, J&C, pp.iv~vii.
- 구인모(2006)「단카(短歌)로 그린 조선(朝鮮)의 風俗誌-市內盛雄 編, 朝鮮風土歌集(1935)에 대하여」『사이

- (SAI)』Vol.1, 국제한국문학문화학회, Gu, Inmo(2006) Tankaro Gurin Joseonui Pungsokji Ichiyama Moriopyeon, *Chosenhudasyu*(1935) e deahayeo : SAI/ Vol.1, Gukjehangukmunhakmunhwahakoe.
- 허석(1997)「明治時代 韓國移住 日本人의 文學結社와 그 特性에 대한 調査研究」『日本語文學』제3집, 한국일본어문학회, Heo, Seok(1997) Myonchishidae Hangukijyu Ilboninui Munhakgyeolsawa gu Tukseone daehan Josaywongu : *Inboneomunhak* vol.3, Hangukilboneomunhakoe.
- 나카네 다카유키(2011)「조선 시가(朝鮮詠)의 하이쿠 권역(俳域)」『日本研究』第16輯, 고려대학교 일본연구센터, Nakane, Takayuki(2011) Joseon Shigai Haiku Gwonyeok : *Ilbonyeongu* Vol.16, KUJC.
- 박광현(2010)「조선 거주 일본인의 일본어문학의 형성과 (비)동시대성-『韓半島』와 『朝鮮之實業』의 문예란을 중심으로」『일본학연구』제31집, 단국대학교일본연구소, pp.328~329. Park, Gwanghyun(2010) Joseon Goju Ilboninui Ilbonoemunhakui Hyungseonggwa (Bi)dongshidaeseong -*Kanhantouwa Chosennojitsugyoui* munyeranul Joongsimuro : *Ilbonhakyongu* Vol.31, Danguk Univ. Ilbonyeonguso, pp.328-329.
- 엄인경(2015)『문학잡지『國民詩歌』와 한반도의 일본어 시가문학』, 역락, Um, Inkyung(2015) *Munhakjapji Kokuminshikawa Hanbandoui Ilbonoe Shigamunhak* : Yeokrak.
- 유옥희(2004)「일제강점기의 하이쿠 연구-『朝鮮俳句一萬集』을 중심으로-」『일본어문학』제26집, 일본어문학회, Yu Okee(2004) Iljegangjeomgiui Haiku, Yeongu—*Chosen Haiku Ichimanshyul* jyunshimuro : *Inboneomunhak* vol.26, Ilboneomunhakoe.